

② 28歳 造船に取り組む

福井藩では通商や軍事に用いるため、洋式帆船を建造する計画を立てます。江戸で大砲小銃の操作法や製造法を調査していた権六はあわせて造船についての調査も行っていました。松平文庫には、権六が筆写したと思われる幕府や薩摩藩の洋式帆船の図面等が伝わっています。

安政4年(1857)船の建造が本格化し、権六がその責任者に任されます。船型は1本マストのカッター(コツトル)と呼ばれる小型船で、同時期に同型のものとして、幕府長崎海軍伝習所で「長崎形」、佐賀藩で「晨風丸」が建造されましたが、いずれもオランダ人の指導を受けたものでした。

これに対し、権六は坂井郡宿浦(現坂井市)において、独力で建造に取り組み、安政6年4月に進水しています。船材は北潟(現あわら市)の松、鷹巣山(現福井市)産の石炭から製したコールタールで船体を黒く塗り、山竹田(現坂井市)産の松根油で帆綱を染めました。

